



五上『漢文に親しむ』（69ページ）



漢文を読もう

言葉のひびきを味わいながら、声に出して読みましょう。

春夜

蘇軾

春宵一刻直千金
花に清香有り月に陰有り
歌管楼台声细细
鞦韆院落夜沈沈

春の夜

春の夜のひとは、千金のねうちがある。

かぐわしい花のかおりがただよい、月はおぼろにかすんでいる。

歌や笛の音は、高殿にか細くひびき、ぶらんこのある中庭に、夜が静かにふけていく。

江南の春

杜牧

千里鶯啼緑紅に映ず
水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の楼台烟雨の中

江南の春

見わたすかぎりの風景の中、鶯が鳴き、木々の緑と花の赤とが美しく照りはえて
いる。

川辺の村や山間の村が見え、酒屋ののぼりが春風にはためいている。

思えば南朝の昔、この地には多くの美しい寺が建ちならんでいたのだなあ。

そのなごりをとどめるたくさん的高殿が、春雨の中にかすんでいる。

山亭の夏日

高駢

緑樹陰濃やかにして夏日長し
樓台影を倒にして池塘に入る
水精の簾動きて微風起こり
満架の薔薇一院香し

山莊の夏の日

緑の葉のしげった木々のかげはこく、夏の日は長い。
水ぎわの大殿が、池の中に逆さまにうつっている。
水晶のすだれが動いて、そよ風がふき、
たないっぱいのばらのかおりが、庭中に広がった。

『ろんご
論語』

学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや。朋の遠方より
来たるあり、亦た樂しからずや。

学んでおりにふれて復習する。すると理解が深まり、本当に自分のものになる。
なんとうれしいことではないか。友が思いがけず遠くからたずねて来てくれた。
ともに語り合い、学問を深めていくことができる、なんと楽しいことではないか。

吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして
惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十
にして心の欲する所に従いて矩を踰えず。

わたしは十五さいの時、学問で身を立てようと決心した。三十さいでひとり立ち
した。四十さいになると、なにごとにも迷わなくなった。五十さいになり、天か
らあたえられた自分の使命をさとした。六十さいでは、他の人の言葉がすなおに
理解できるようになった。七十さいになると、自分の心のままに行動しても、人
の道にそむくことがなくなった。